日本生活科・総合的学習教育学会　第２３回全国大会　埼玉大会

かかわりを深め、新しい社会を創造する学び（その２）

～学会発祥の地から新たな学びの提案～

埼玉大会会長　若手三喜雄（共栄大学）

平成２６年６月１４（土）、１５（日）の埼玉大会が近づいてきました。埼玉らしさを前面に出した大会にできればとの思いから、これまでは隔月で集まり、準備を進めてきました。これからは、毎月集まって、いよいよ全国大会当日を想定しながらの準備にかかります。

今回は、大会テーマについて考えてみることにします。一つは、***「かかわりを深める」***ことについてです。人間関係が薄れてしまった社会と言われ続けて久しくなります。確かに、社会が便利になってくるほど、人と人とのかかわりは薄れてきています。携帯電話が普及し、直接、顔をつきあわせての会話がなくてもすんでしまうどころか、声を聞くことなく抽象化された文字での会話ですんでしまっているのが現状です。人と人とがますます孤立化してきている感じがしています。

もちろん、全てがいけないわけではなく、便利な社会になるということは、ノーマライゼーション社会がますます進展してきているとみることもできます。便利な社会には、光の当たる場所とそれに伴って、陰の場所ができてしまうのは必然的なことでもあります。私たちは、便利さの中に両面があることを理解しながら、子どもたちの教育活動に当たる必要があるものと考えます。

生活科や総合的学習の中での「かかわり」は、学習活動を展開していく上で重要な役割を担ってくることになります。人とのかかわり、社会とのかかわり、自然とのかかわり、全てを包括しながら、自分とは何かを追究していく学習活動が展開されるということです。「かかわり」がより一層深まってくることが、自分づくりには欠くことのできないことになっていると考えます。

二つには、***「新しい社会を創造する学び」***についてです。昭和の教育と平成の教育とでは大きな転換が見られます。端的に言えば、昭和の教育は、社会の進展に伴って多くの知識や技能を身に付けることが中心であったと考えます。つまり、教えることは教師の中にある時代の教育であったということです。

それに比べて平成の教育は、新しい学力観や生きる力にも見られるように、多くのことを覚えることには限界があり、むしろ子どもたちが自ら学び自ら考えるなどの教育が中心となってきました。つまり、学ぶことは、子どもの中にある時代の教育とも言えます。

それでは、これからの教育を考えたときに、もう一歩進んで、学ぶことは社会の中にある教育を推進していくことが大切なのではないかと考えます。

これからの子どもたちには、社会の中から様々な学習材を見つけ出してきて、その学習材をみんなで力を合わせて、調理しながら、社会に提案していけるようなものにしていくという学習活動こそが求められているのではないかと考えます。このことが、新しい社会を創造する学びではないかと考えます。

今年の兵庫大会２日目には、生活科・総合的学習を通して育った高校生たちの素晴らしい姿から多くのことを学ばせていただきました。その中でも特に、地域社会に積極的にかかわりながら取り組む「ふるさと創生プロジェクト」の姿が印象に残りました。このような子どもたちが育つための生活科・総合的学習の授業の姿を埼玉から発信していきたいと考えています。

全国から大勢の皆様方にご参加いただき、協議を深めていきたいものと願っています。